エディトリアル

沖縄地域医療支援センター センター長　**崎原永作**

わが国は，ユーラシア大陸の東縁に沿って，いわゆる『日本列島』として最北端の択捉島から最西端南の与那国島までの全長3,000kmに渡って島々が弓なりに連なる世界有数の海洋島嶼国である．列島を構成する島々は「本土」５島（北海道・本州・四国・九州・沖縄本島）を中心としてその周囲に6,800余の小離島があり，国土面積の12倍以上に及ぶ広大な200カイリ排他的水域を確保している．それらの島々の中で，有人離島は約300島あり，南北に広く点在していることも相まって，島々を取り巻く環境は実に多彩である．島の大きさや人口，本土にある中心的な都市からの距離，アクセス手段などさまざまな要因や地域特性から生じる医療ニーズは島ごとに異なってくるため，個々の医療ニーズに対応したオーダーメイドの医療サービスを提供していくことが離島医療では大切になってくる．ひと口に離島医療と言っても一筋縄ではいかない．島の医療ニーズにていねいに対応していくことの積み重ねの中で，その島ならではの離島医療が形づくられてきている．

最初に，長崎県 対馬いづはら病院の山口卓哉先生から199床の中規模離島病院の取り組みをご報告いただいた．島内の３病院の中の最大規模の病院として，島での治療の完結を目指して，島全体の救急体制や診療連携体制の構築に注力されている姿が伺える．ついで小規模離島病院から島根県 隠岐島前病院の白石吉彦先生にIT技術を駆使した医療連携システムの地域医療支援ブロック制の取り組みをご紹介いただいた．群島を１つのゾーンと見た大きなグループ診療の形だ．続いて沖縄県の渡名喜診療所の佐久川俊樹先生にご自身の経験された２つの孤立小規模離島でのソロプラクティスの現状をご報告いただいた．そして内海近接型診療所の立場から大分県 姫島村診療所の三浦源太先生からは隣接する高齢者福祉センターとともに自治体と一体となった地域包括ケアの実践をご紹介いただいた．続いて離島診療所を支えるシステムをご紹介する．無医島の多い離島を支援する鹿児島県の巡回診療，医師１人体制の診療所を代診派遣を中心に支える沖縄県のゆいまーるプロジェクト，長崎県のヘリコプターによるドクターデリバリーシステム“NIMAS”を，それぞれ鹿児島赤十字病院の永井慎昌先生，沖縄地域医療支援センターの崎原，市立大村市民病院の立花一幸先生に紹介していただいた．それぞれの環境下で最適解を求めて，発展していった離島医療の最前線は実に多彩である．この多彩さは歴代の離島医療関係者の創意工夫の総和であろう．この多彩さを共有することは，さらなる離島医療の発展につながるはずである．